

験ではハウレットチャートとパーガーファントムを使ってその分解能の優劣を検討したが、同程度の線量を与えた場合には両者の分解能に差はなかった。しかし FCR で撮影線量をおとした場合には明らかに分解能の低下が見られ、FCR で有用とされている低線量撮影は画像の劣化を招くと考えられた。また臨床症例による検討は FCR と通常撮影の同日撮影を行ったうちの有所見者95症例・154所見を、結節影、浸潤影等の9病変に分類して比較検討した。その結果 FCR では縦隔等に重なった病変や気管・気管支及び石灰化病変では通常撮影より所見が良く示現されていたが、5mm 以下の粒状影、間質影である網状・スリガラス状影、淡い浸潤影では明らかにその所見の示現が不良となっており、この点が FCR の臨床応用上の問題点と考えられた。

2) CR の使用経験

県立がんセンター新潟病院放射線科
新妻 伸二

CR が当院に導入されて、まだ4カ月にしかならないので、一部の使用経験しかないが、CR は胸部単純撮影、断層撮影、あるいはゼロラジオグラフィの代替として、乳房その他の軟線撮影に、充分にその威力を発揮できるものと期待される。

しかし、われわれの病院では、CR 新築移転計画の最終段階でその導入が決まったため、システム化に遅れをとり、コンピュータ化にもっていないため、運営に苦慮している。

CR は単なる装置ではなく、これは一つのシステムである。最初から十分な計画をもって、導入しなければならない。また少なくとも2系統の装置を設置しなければ、処理能力からいっても、フル稼働は出来ないものと考えられる。

特別講演

CR 共同利用システムとその画像診断について

川崎市がん検診センター所長
吉田 貞利先生

第27回新潟化学療法同好会

日時 昭和63年6月25日(土)
午後2時
会場 ホテルイタリア軒

一般演題

- 1) Methicillin-Cephem 耐性黄色ブドウ球菌 (MRSA) に対する Latamoxef と Cefamandole の併用療法が有効であった1症例

一相乗効果と組織内濃度の in vitro で
の評価および臨床効果の検討

田中 久夫・富山 道夫 (新潟大学耳鼻)
新島 元・中野 雄一 (咽喉科)

症例は48歳男性、下咽頭癌(右梨状陥凹型) T₃N₃M₀ の診断で咽喉頸部食道摘出術、両側頸部郭清術、甲状腺全摘術、微小血管吻合前腕遊離皮弁による再建術を行った。

術後は CTM 1g・FOM 2g 1日2回点滴静注を行ったが、術後10病日頃から drain の抜去部位より膿の流失あり、また気管膜様部に瘻孔を形成した。細菌培養より MRSA が検出された。CMD 2g・LMOX 1g 1日2回に変更したところ、ほぼ1週間で膿の流失が止まり、2週で完治した。

in vitro で checkerboard titration method による相乗効果と HPLC による膿中への組織移行性を測定し、臨床効果の検討を行った。

- 2) アデノイド切除術による上咽頭細菌叢の変化

富山 道夫・田中 久夫 (新潟大学耳鼻咽
喉科)
中野 雄一
荒井 辰彦 (秋田赤十字病院
耳鼻咽喉科)
後藤 晃 (同 細菌検査科)

小児滲出性中耳炎においてアデノイド切除術は、耳管咽頭口の機械的閉塞の改善と感染病巣を除去する目的で行われる。閉塞の程度の改善については種々の報告がみられるが、後者に関する報告は少ない。そこでわれわれは小児滲出性中耳炎罹患児20名を対象としてアデノイド切除術を行い、手術前後の上咽頭細菌叢の変化について検討した。その結果術前に咽頭病原菌が検出された症例16名中11名において、術後に病原菌の有意の減少を認められた。